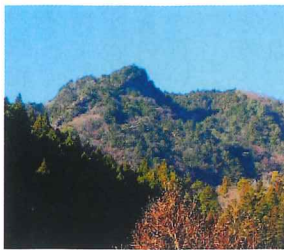


三河の大峯 竜頭山

令和五年の晩秋、知人から「来年は辰年なので竜頭山に登りたい」と案内を頼まれた。年の暮れも近く予定が合わず登山日は、十二月三十日と決まり登る準備をする。私が最後に登ったのは、昭和四十九年に石仏や植物を調べた時なので、五十年ぶりに登ることになった。



竹島から見る大竜頭

この山は、設楽町・旧鳳来町・旧作手村の境となる標高七百五十二メートルの山で、山頂部に二等三角点がある。その周辺は広い緩斜面の植林地帯で、近くに林道が来ている。北東部は、火山活動で出来た安山岩や玄武岩の岩脈や、絶壁が連なる急峻な地形が当貝津川まで落ち込んでいる。作手の小滝方面から見える岩頭が小竜頭、設楽の竹島側から見える岩頭が大竜頭と呼ばれ、三ヶ所のピークがある。

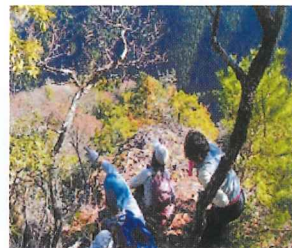
この山は、古くから修験道の山として知られ、大正十三年に三河の大峯として竜頭山の開創が行われた。その記念碑が竹島の道を上流に進み、竜頭沢（西



竹島山玉宝院本堂

の玉宝院下の国道脇にあつて、石碑の背面に発起者である竹島の山村久平・下山梨野の大竹長平・玉宝院鳥快雅をはじめ近隣町村から多くの人が開創に参加している。修験道は日本古来の山岳信仰と仏教の密教・道教などが結びついて、平安末期に成立した宗教で、役小角を初祖としている。山岳での修行を通して自然の霊力を獲得し、人々の苦悩を救済する宗教の一つである。中心となった玉宝院は真言宗醍醐寺派、山号は竹島山、本尊は不動明王で、京都の真言宗醍醐寺三寶院の末寺、中興開山は、貞享元年（一六八四）豊永法印、密教系の寺院で檀家は少ないが加持・祈祷の依頼を受け、郡内唯一の寺であつたが、現在無住となつている。

畑川）の合流部から沢沿いの道を登ることにした。



大竜頭岩脈

半世紀ぶりということ、少し不安もあつたが、当時の感動を思い楽しみであつた。

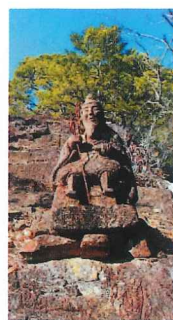
登山当日は快晴で、幸先の良いスタートとなる。ふるさとガイド二名が参加し四名で玉宝院前を出発、竜頭橋を渡り竜頭沢の合流部まで約十分、そこには以前なかつた三基の大型砂防ダムが建設され、道はダムの上側に付け替えられていた。ダムを過ぎると昔の道に出たが、数ヶ所崩落して道はほとんどんわからなくなつた。

昔の記憶をたどり、道なき道を歩くとうまくやく沢を横断する目印の、行者様が安置される大岩に着いた。ここから先は道がわからず、沢の中を登り沢の合流部にある目印の石塚に着く。この辺りに風神様の石仏が安置されていたが、今回それはなくなつていた。

この谷底を登ると聳え立つ絶壁の中ほどに、火山活動でできた竜の穴と伝わる直径一・五メートルほどの穴が五ヶ所ほどあ

いている。一番下の穴の奥に「八大龍王」と刻まれた高さ六十センチほどの石板が祀られている。残念ながら今回はそこまで行

けず、石塚から三十分ほど山腹をトラバースして表コースの尾根道に出る。十五分ほど登ると岩脈の下にたどり着く。ここからは少し危険な足場になるので慎重に登る。やがて岩脈の上に出ると目印の行者様が出迎えてくれる。



行者様

ここには二体の行者様と鬼の石仏が安置されていたが、鬼の石仏はなくなつていた。

岩脈上に立つと奥三河の山々をすべて見渡すほどの絶景が広がり気分は一変する。

ここで少し休憩してから岩頭部を目指して登ると、途中に「大和国大峯山二拾八度練行供養碑」が立っていた。

頂上には、祭事を行う三坪ほ



大竜頭山頂

どの平地と石積があつて、中心に石祠が祀られ向かって左に弘法様、右に行者様、少し手前に観音様と地藏様が安置されている。その周りには、直径十メートルほどの円を描くように九体ほどの石仏がとりまいていて、さすがに修験道の山であることが実感できた。

（設楽町文化財保護審議会委員 加藤 博俊）